資料

計量行政審議会平成17年度第1回議事録（3）

平成17年度第1回計量行政審議会は平成17年7月26日㈫午後1時から同2時40分まで、経済産業省本館17階第1・第2共用会議室で開催された。審議時間は1時間40分であった。

議事内容は次のとおり。（氏名をフルネームにして、委員名簿に基づいて所属を追加し、また一部に見出しを付加した）

配付資料はウェブサイト「2005年度計量法改正情報BOX」（http://www.keiryou-keisoku.co.jp/hou-kaisei2005/001simngikai/g01_20050726.htm）、経済産業省ウェブサイト（http://www.meti.go.jp/committee/materials/g50913ai.html）からダウンロードできます。（編集部）

（2607号のつづき）

アメリカでのヤード・ポンド復活を危惧

飯塚幸三委員（㈳日本計量振興協会会長）　その一つが単位の問題でございまして、この文書の中にも、メートル法がかなり定着したから、そろそろ弾力化してもよいのではないかということもちょっと書かれておりますが、現在の学校教育の中でメートル法が本当に正しく教えられているかどうかという点もいろいろ聞いておりますと、非常に危ぶむところがございます。そういう意味では、私は、まだメートル法が完全に定着しているとは言えないのではないかと考えております。

したがって、単位の定義については現在、国際的に取り決められております国際単位系――これはメートル法を含んだものでございますが――に、日本が一層遵守するという方向をぜひ堅持していただきたい。特にアメリカが現在、経済的に一極集中になって、ヤード、ポンドが復活するようなことは絶対あってはならないのではないか、むしろアメリカを説得していくべきではないかというふうに思っております。

ただし、弾力化の中で、計量単位の標準について現在、産業技術総合研究所が実際の実現についてその任をもっているわけでございますが、この部分については非常に技術的な進歩が早いわけでございまして、それが現在の体系では法律の中で決められている。例えば単位の名称にしても、その実現の仕方まで法令の中で決められているということになりますと、非常にその対応が遅くなる。

先端技術の導入は研究機関の裁量で

飯塚幸三委員　昔、メートルの定義はクリプトン86という光の波長になったときも法律改正の方が数年以上おくれて国際的にも大変恥ずかしい思いをしたようなことがございます。これはあくまでも法律が余りにもリジットにそういう技術的な中身まで入り込んでいるのではないかと思いますので、その辺は検討すべき時期になっているのではないかということを申し上げたいと思います。

それから、産業技術総合研究所が実際の一次標準を持っているといっておりましても、現在、独立行政法人になって、法律上のいろいろな国内の権限等について見直すべき時期に来ているのではないかということが第2点でございます。

さらに、計量標準の一次標準だけでなくて、実際にはトレーサビリティ、先ほどもお話がございましたけれども、実用の標準までこれをどうつなぐかということで、JCSSというお話もございましたけれども、日本全体の計量標準を同一の目盛りに全部統一していくためのいろいろな取り決め、これは恐らく産業技術研究所などの標準関係の研究所の技術的な判断を仰がなければならないところが非常に多いと思うんでございますが、それが行政の仕組みとどのようにマッチするのか、私は外から見ていて懸念をしております。そういう技術的な問題については、研究所の裁量でいろいろな進歩を取り入れられるようにしていくべきではないかと思っております。それが第3点でございます。

計量士活躍の場が限られることはもったいない

飯塚幸三委員　第4点、私ども日本計量振興協会でございますが、メンバーの中に計量士がたくさんいらっしゃいます。環境計量士と一般計量士と二つ分かれているわけでございますが、国家試験として非常に難しい試験になっております。現在、一般計量士だけでも累積で1万人以上の方がいらっしゃって実際に活動されているのは1000人から3000人の間ぐらいと思っておりますけれども、これらの方々が難しい試験を通って十分な知識を持っていて、国家としては大変もったいないのではないかと思っております。

先ほど安心をどうやって維持するかというお話がございましたけれども、例えば商品の量目等にいたしましても、適正計量管理事業所という制度で本来は保たれるべきでございますし、実際にきちっと法令を守っておられるところもあるけれども、必ずしも十分にこの制度もすべてのところで活用されているわけではない。

そういう中で一般計量士の方々も必要なところでは活躍しているわけでございます。それらの役割について十分な、非常に対価が高いとか、あるいはコストがかかるということではございませんので、むしろ社会的には活用する方が社会全体としても利益があるのではないかなと思っております。そのお辺についても、この中に多少問題提起がされておりますが、ぜひ御検討していただきたいと思っております。ちょっと長くなりました。以上でございます。

田﨑雅元委員（川崎重工業㈱取締役会長）　ありがとうございました。ほかに御意見は。田中委員。

NMIJの活躍に向けた配慮に感謝

田中充委員（㈱産業技術総合研究所計測標準研究部門長）　産業技術総合研究所の田中でございます。ちょうど飯塚委員がおっしゃったことにかんがみまして、一言申し上げたいと思います。

10ページになりますけれども、NMIJの一層の活躍のためのもむ